タイ人日本語学習者と日本語母語話者の視座の置き方に関する分析
―10コマ漫画の描写に見られる視点表現を中心に―
Analysis on Standpoints of Thai Learners of Japanese and Japanese Native Speakers: Focusing on Viewpoint Expressions Used in Narratives of 10-panel Comic Strip

ラルアイソング　タナパット
RARUAISONG Tanapat

Abstract

The aim of this study is to investigate the differences of standpoints (Shi-za) between Thai learners of Japanese and Japanese native speakers. The data was drawn from narrative essays of 10-panel comic strip, and analyzed by focusing on uses of viewpoint expressions, i.e. passive expressions and benefactive expressions. As a result, while most of Japanese native speakers fixed their standpoints at the main character, Thai learners were likely to change their standpoints between the main character and the supporting one during narratives, which brought about the contrast of viewpoints. The findings indicated that even though Thai learners were capable of using viewpoint expressions grammatically, they could not apply these expressions appropriately in order to fix standpoints, due to the effect of the way of expression in Thai.

I. 研究背景

日本語では、一連の流れがある談話では視点を特定の人物に固定して表現したほうが、談話の内容が理解しやすくなる。しかし、日本語学習者は、一連の流れがある談話の中であっても、視点を固定せずに表現することがあり、それが日本語の文章の分かりにくさにつながるという指摘がある（田代 1995）。以上の問題から、日本語教育において、視点や視点表現の使用を取り上げた研究が盛んになされている。中国語を母語とする日本語学習者を対象とした研究（田代 1995；坂本 2005；林 2005；魏 2010；武村 2010）をはじめ、韓国語を母語とする日本語学習者を対象とした研究（田代 1995；金 2001 など）や、英語を母語とする日本語学習者を対象とした研究（田中 1997；佐藤 1997 など）がなされており、日本語学習者の視点の問題に関する指摘が報告され

ている。

タイ人日本語学習者（以下、TL）[1] の場合も、視点の固定について理解していないため、次のように誤用をおかすことがある。

（1）＊先生が褒めて、嬉しかったです。
（2）＊高橋さんは私にお土産を買ってあげました。

（1）では、一文の中に 2 つの主語が入っている。つまり、前件は「先生」、後件は「（私）」が主語であるため、不自然に感じられる。また、（2）では、主語が第三者で、「私」が動作を受けたにもかかわらず、「～てあげる」が使用されている。そのため、非文になっている。しかし、（1）（2）のような表現は、タイ語では自然な表現である [2]。視点の観点から考えると、日本語の場合、視点を「私」に置いて（1）’のような受動表現と、（2）’のような授受表現で表現しなければならない。

（1）’先生に褒められて、嬉しかったです。
（2）’高橋さんがお土産を買ってくれました。

以上の（1）と（2）では、視点に関わる誤用を取り上げて、TL の問題点を提示した。しかしながら、TL を対象とした視点研究は、管見の限り、TL の受動表現を中心に視点と関連づけた習得研究（サウェットアイヤラム 2008）のみである。サウェットアイヤラムでは、受動表現の機能について取り上げられているが、視点研究の観点から十分に考察されていない。そこで、TL が理解しやすい日本語が用いられるようにするためには、TL の視点の置き方について分析する必要がある。本研究では描写タスクによる調査を通して、TL と日本語母語話者（以下、NS）[3] の視点（或いは、視座）の置き方および視点表現の使用状況を明らかにしたい。

II. 先行研究

1．視点および事実志向・立場志向

視点（Viewpoint）は「見ること」に関わる概念である。視点の定義については、松木（1992：57）は「『視点』とは、本来『物事を見る立場』のことであり、『見る』行為と切り離しては論じられない」と述べている。

また、茂呂（1985）は「見ること」の基本的な要素を 4 つ挙げており、これらの基本的な要素

1　Thai Learner の略語である。
2　タイ語で表現すると、（1）は「ʔaacaan chom kɔ̂ləəy diicay」（先生が褒めました。だから、嬉しかったです）、（2）は「khun-Thaakhaahaachí sɯ́ɯ khɔ̌ɔŋfàak maa hây chǎn」（高橋さんはお土産を買ってきて、私にあげました）という文になる。いずれも不自然さが感じられない。
3　Native Speaker の略語であり、ここでは日本語を母語とする話者を指す。

を言語表現を通して取り出すことができると述べている。それに、松木は茂呂に基づき、さらに基本的な要素を検討している。表 1 は茂呂と松木による概念をまとめたものである。

表 1　視点の基本的な要素

	茂呂（1985）	松木（1992）
視点人物	だれが見るのか	見る主体
視座	どこから見ているか	見る場所
注視点	どこを見ているか	見られる客体（対象）
見え	見たこと	見える様子

次に、視点と事実志向・立場志向という概念の関わりについて論じたい。ある出来事に対してそのまま事実として表現するのは「事実志向」である。一方、同様の出来事を話者の立場から捉えて表現するのは「立場志向」である。水谷（1985）は日本語と英語の話し言葉に現れる文法の比較を通して、一般的に英語は事実志向が強く、日本語は立場志向が強いと述べている。また、日本語と英語の文づくりの傾向などに関して、次のように指摘している。

（3）「事実志向型」と「立場志向型」の別は、日本語と英語の文づくりの傾向や主語の立てかたを比較する際の、ひとつの柱として考えられるが、この二つの型の切り替えのむずかしさが、日英両語を外国語として学ぶ際の大きなつまづきとなる。英語話者が日本語を学ぶ際に「ダレカガワタシノ財布ヲトッタ」式の不適切な発話をすると同時に、日本語話者が英語を使う時にも、必要以上に立場志向の文を作ろうとする傾向がある。（水谷 1985：24）

以上の指摘から日本語の傾向としては立場志向が強く、NS は、目標言語である英語で表現する際にも立場志向の文が見られることが示唆された。立場志向の概念を取り上げて視点の観点から考えると、話者の立場は、視点の基本的な要素である「視座」（＝どこから見ているか、或いは見る場所）に相当する。言い換えれば、日本語は立場志向が強いため、話者の立場から出来事を捉えることが求められるが、それは話者に視座を固定して表現するということを意味する。その反面、事実志向では、事実がそのまま描写されるため、話者以外の動作主の立場から出来事を捉えることも可能である。従って事実志向の場合、視座が移動し、話者以外の人物に置かれることがある。

ただ、日本語では、話者に視座を固定することが一般的であるとはいえ、途中で視座を移動させることがないわけではない（中浜・栗原 2006）。中浜・栗原は 5 コマ漫画を用いて調査した結果、対象者の NS39 名中 2 名に視座の移動を観察している。しかし、2 名とも視座を移動させる前に会話文を挿入していると報告しており、「会話文を挿入することで視座の移動が違和感なく行われ

ている（中浜・栗原 2006：102）」と指摘している。すなわち、日本語の場合、会話文の挿入などの工夫をしながら、視座を移動させることがある。

一方、日本語学習者の視点は、どのように扱われているのだろうか。田代（1995）は、文章の分かりにくさを探るために、中国語を母語とする日本語学習者と、韓国語を母語とする日本語学習者の文章を分析している。結果として、次の考察を行っている。

（4）日本語話者の文章は主人公となる人物の視座から述べていく文がほとんどであるのに対し、中国語話者の文章はそれ以外の人物の視座から述べる文が混じることが多い。韓国語話者の文章も中国語話者のに比べるとやや少ないがやはり主人公以外の人物から描かれることが多い。こうした文は日本語の文章として不自然である。（田代 1995：35 – 36）

（4）で分かったように、中国語母語話者と韓国語母語話者の学習者は、日本語の文章において視座を主人公以外の人物に移動させることが多いと問題視されている。つまり、日本語学習者の問題点は、視点の基本的な要素の一つとして捉えられる「視座」の置き方にある。

次に、タイ語における視座と表現形式について記述したい。拙論（2011）では、受動表現の使用を中心に、日本語とタイ語の視座について分析している。受動表現は、主語が働きを受けるものとして出来事を描写するため、視座がその主語にあると判断できる。日本語原文の小説と、それに対応するタイ語訳文の小説 3 組を対象資料に、両言語における受動表現の使用数を調べた結果は、表 2 の通りである。

表 2　日本語原文とタイ語訳文の受動表現の使用数（例）

	小説A	小説B	小説C	合計
日本語原文	162	28	77	267
タイ語訳文	51	18	24	93

表 2 で分かるように、日本語原文の小説に見られる受動表現の総数は 267 例にも達したが、タイ語訳文の小説に翻訳されると、受動表現の総数は 93 例に過ぎない。すなわち、日本語では、受動表現が約 3 倍使用されていることが分かる。これは、日本語の受動表現がタイ語に翻訳される際に、能動表現といった別の表現が使用される場合が多いためである。タイ語訳文の小説において、受動表現の代わりに能動表現などが使用されることで、視座が固定されず、頻繁に移動していることが明らかになった。

以上、視点、事実志向・立場志向、タイ語の視座について記述してきた。TL の視座の置き方を明確にするために、本研究では、事実志向と立場志向の概念を参考にしながら、考察を進めるこ

とにする。

2. 視点表現

視点表現とは、視座の位置を判断する構文的手がかりである（中浜・栗原 2006; 魏 2010）。視点表現が現れることによって、視座の位置を判断することが可能である。これは、茂呂（1985：51）が述べた「言語表現を与えられると、その中に『視点』を見つけることができる」という点と一致する。

視点表現に焦点を当てて、日本語学習者の視座を分析した研究は、坂本（2005）、魏（2010）、武村（2010）などが挙げられるが、研究者によって視点表現として扱われたものは少しずつ異なる。本研究では、従来の研究（大江 1975; 久野 1978; 田代 1995）で共通して検討されてきた「受動表現」と「授受表現」の２つに絞り、表３で示すように視点表現として扱うことにする。

表３　本研究の視点表現

文法項目	形式	例
受動表現	～（ら）れる	私は鈴木さんに怒られた。【私】
授受表現	～てあげる	私は鈴木さんに写真を撮ってあげた。【私】
	～てくれる	鈴木さんが私に写真を撮ってくれた。【私】
	～てもらう	私は鈴木さんに写真を撮ってもらった。【私】

【　】内は視座を示す。

上記の視点表現を立場志向に関連づけて述べると、動作の方向や利益・恩恵の方向が関わってくる。受動表現は受動形を表す形態素「～（ら）れる」で示すことで、話者が他からの働きを受ける意を表す。従って動作の方向が話者に向けられており、視座が話者に置かれる。

次に、授受表現を見ると「～てくれる」と「～てもらう」は、話者が他人の行為によって利益・恩恵を受ける意を表す。そのため、恩恵の方向が話者に向けられ、視座が話者に置かれることが分かる。また、「～てあげる」は、利益・恩恵の方向が相手に向けられるが、話者自身から恩恵を与えることを考えると、動作主として視座が話者に置かれるようになる。

一方、話者が関与しない出来事の場合、「出来事に関与した人物のうち、話者にとってウチの人物の視座から出来事を語る傾向がある」と武村（2010：293）が述べている。すなわち、出来事に関与しない話者であっても、関与しているウチの人物の立場から捉えることができる。ウチの人物として表現することによって、視点表現の使用が可能になる。

III. 研究概要

本研究では、TL と NS の視座の置き方について解明するために、先行研究を踏まえて、以下のように TL の傾向に関する仮説を立てた。

仮説 i：TL は、主人公に視座の固定を継続しない。

仮説 ii：TL は、視点表現を学習したものの、場面にそぐわない表現を使用するか、必要な場面では使用しないという問題点がある。

上記の仮説を検証するために、主人公を調査参加者の友人（ウチの人物）として設定した漫画を題材に、描写タスクを設定した。その概要は次の通りである。

1. 調査参加者

描写における視座を分析するために、12 名の TL と、12 名の NS を調査参加者とした。TL 全員はタイの大学に在籍しており、日本語を専攻とする 3 年生であり、2 年次に文法の授業で受動表現や授受表現を学習済みであった。また、全員が中級レベルであるが、参考として日本語学習歴や、本調査の小テストの得点などを配慮した。一方、NS は日本の大学の 2 年生～ 4 年生であり、専攻は様々である。

2. 題材

（1）10 コマ漫画

TL と NS の視座の置き方を分析するために、描写タスクの際に、文字情報のない自作漫画を使用した。この漫画は 10 コマからなり、場面①～場面⑩で構成されている。登場人物の設定は始終 2 人のみである。各コマでは、左側に主人公である「田中」と、右側に主人公の友人である「鈴木」という登場人物を設けた。

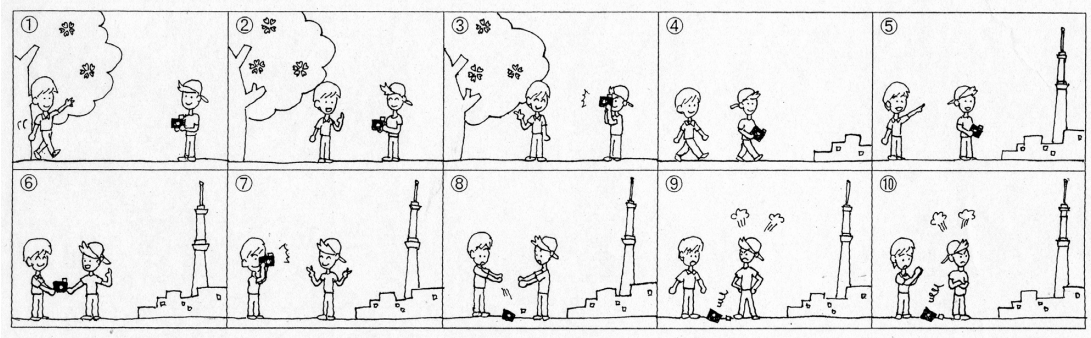

図 1　10 コマ漫画

（2）小テスト

小テストは受動表現と授受表現だけでなく、移動表現などを含み、5 つの視点表現[4] を中心に

問うものである。24 問で構成されており、そのうち視点表現に関わる問題（15 問）と、ダミー問題（9 問）を設けた。問題の形式や語彙などは、平成 13 年度～ 17 年度の日本語能力試験公式問題集（3 級）を参考にして新たに作成した。ただ、小テストを受ける該当者は TL のみである。結果については、24 点満点で得点の平均値は 18.41 であり、全員 75％に達している。

3．調査方法

本研究では、TL と NS の視座の置き方および視点表現の使用状況を調査するために、描写タスクを設定した。手順としては、まず、ストーリーの流れを確認させるために、TL に 10 コマ漫画を見せた。その際「田中」が主人公であることを予め提示し、ストーリーの設定は自由だと説明した。

次に「自分が田中の友人になって、田中が経験したことを別の人に伝えるつもりで描写してください」と指示し、日本語で文章を書いてもらった。時間制限は 15 分以内とした。文章の長さは設定しなかったが、できるだけ全てのコマについてもれなく書くように指示した。NS に対しても、同様に描写タスクを実施した。

さらに、TL の場合、日本語で書く描写タスクが終了した後、参考としてストーリーについて改めてタイ語で文章を書いてもらった。ただ、先に書いた日本語の描写に対応する訳文ではなく、タイ語で描写し直すように指示した。最後に、TL に対して小テスト（時間制限：10 分以内）およびフォローアップ・インタビューを行った。

4．分析方法

視座の置き方を分析するために、まず、構文的手がかりとして受動表現と授受表現に注目し、TL と NS の文章における視点表現を特定した。視点表現の構文に見られる表記ミス（「撮ってあげる」とすべきところを「撮ってあける」にしたものなど）は、有効データとして扱った[5]。しかし、構文が正しくても内容の理解に影響した視点表現（田中がカメラを持って写真を撮った場面で「田中は写真を撮ってあげた」とすべきところを「田中は写真を撮ってもらった」にしたものなど）は除外した。また、登場人物の会話文にある視点表現は、データとして扱わないことにした。

次に、視点表現が現れた文を分析し、視座がどの登場人物に置かれたかを判断した。最初に置かれた視座と、後ほど置かれた視座が一致する場合、「視座の固定」が行われたと見なした。他方、ある登場人物から他の登場人物へ視座が移動した場合、「視座の移動」として捉えた。分析の例として、TL の文章を見よう。下線部が視点表現、【　】内が視座が置かれた登場人物を示す。

（5）すずきさんはきれいなしゃしんと<u>とってあげました</u>【鈴木】。そして、ふたりは

4　全体的な傾向を見るために、受動表現と授受表現の他に、視点表現として捉えられている移動表現、主観表現、感情表現に関わる問題も出題した。

5　市川（1997）は、「あげる」は発音上、または表記上「あける」となりやすいと指摘している。本研究では、視点表現の構文を中心に分析するため、表記ミスとして認めながら有効データとして扱うことにした。

Tokyo Tower に行きました。（中略）田中さんはカメラをもらって、しゃしんをとると、すずきさんにカメラをかえすつもりだ、でも、カメラをおちた。そのりゆうは今まですずきさんにおこられている【田中】。（TL3）[6]

（5）では、最初に視座は「鈴木」に置かれた。しかし、ストーリーが展開していくと、「田中」に置かれるようになった。この場合、TL3 の文章では視座の移動が行われていると見なす。

Ⅳ. 結果と考察

1．視座の置き方

ここでは田代（1995）を参考にして、TL と NS の文章に見られた視座の比較を行った（表 4）。

表 4　TL と NS の視座の比較（人数）

視座	TL	NS
主人公のみ（田中）	3	8
主人公以外の人物のみ（鈴木）	1	0
主人公とそれ以外の人物（田中と鈴木）	4	2
構文的手がかりなし	4	2

先行研究で指摘されてきたように、日本語では主人公に視座を固定したほうが談話の流れが理解しやすいとされている。しかしながら、文章における視座を比較した結果、「主人公のみ」、つまり田中のみに視座を固定した TL は 3 名しかいなかった。例として（6）（7）を参照されたい。

（6）田中は友達と一緒にこうえんへ行きました。田中さんは本がきれいだと思うから、すずききさんに「しゃしんをとってくれたい」とききました。たなかさんは「はい」とこたえました。それから、二人はあるいていなから、すずきさんは「このビルとしゃしんをとれたい」と言いましたから、田中さんは「私はしゃしんをとってあけるか」と言いました。でもしゃしんをとったあとで、田中さんはカメラをおとしてしまった。田中さんはおこられた【田中】。田中さんはおれいを言ってもすずきさんはまだゆるさない。どうして田中さんはおれいを言ってもすずきさんはまだゆるさない。田中さんはわざわざしゃしんをとってあけた【田中】。(TL7)

（7）先月、ある友達の日本人の申中さんは休日に友達と一緒に旅行しました。その場所

6　例として示す TL と NS の文章は、誤植などを修正せずにそのまま転記した。

に行くと、田中さんはさんぽしながらけいきを見ました。田中さんはしぜんが大好きです。田中さんは「この木と私のしゃしんをとってくれて」と友達と言っています。田中さんの友達はとうきょうTOWERとしゃしんをとりたいと思っています。田中さんは友達のしゃしんをとってあげました【田中】。でも、田中さんは友達のしゃしんをとってあげてから【田中】、ついカメラをおちてしまいました。田中さんは悪い気持ちがかんじました。そして、田中さんは「すみませんね」とあやまました。でも、田中さんの友達はとても怒って、ゆるさせなかったです。(TL10)

（6）（7）で分かるように、TLは主人公の「田中」に視座を固定して、受動表現や授受表現を用いている。前述したように、「主人公のみ」に視座を固定したTLは12名中3名しかいない。これに対して、「主人公のみ」に視座固定したNSは12名中8名いる。（8）（9）を見てみよう。

（8）私の友人の田中という人が、鈴木という人にその人のカメラで木と一緒の写真をとってもらいました【田中】。その後、田中と鈴木は一緒にタワーの見える場所に移動し、田中はさっきのおれいに鈴木のカメラで鈴木とタワーの写真をとってあげました【田中】。ところが、田中はそのカメラを鈴木に返す時、カメラを落としてこわしてしまいました。鈴木はおこってしまい、田中があやまってもゆるしてくれませんでした【田中】。（NS3）

（9）この間、俺の友達の田中が鈴木って奴と桜見に行ったんだって。それで、田中は鈴木に写真を撮ってもらったらしい【田中】。しばらく歩いたらスカイツリーが見えたから、今度は鈴木のカメラで田中が写真を撮ってあげたんだって【田中】。そしたら田中が鈴木にカメラを返す時に手を滑らせてカメラを落としちゃって、鈴木のカメラを壊しちゃったらしい。田中は謝ったんだけど、鈴木は許してくれなかったんだってさ【田中】。（NS6）

また、視座が主人公以外に置かれた場合として「主人公以外の人物のみ」と、「主人公とそれ以外の人物」が挙げられる。この2つを合わせると、TLには5名いる。以下のTLが書いた（10）は「主人公以外の人物のみ」に視座を固定したものを示す。TL5は「私の友たちは田中さんです」という文を最初に書いたことから「田中」を主人公、或いはウチの人物として意識していることが分かった。にもかかわらず、主人公でない「鈴木」に視座を置いたため、「鈴木」をウチの人物として捉えたような表現となっている。

（10）私の友たちは田中さんです。きのう田中さんはにわに行った。田中さんはすずきさんに私にとられてくださいとたのんだ。すずきは聞いて、とってあげた【鈴木】。そして、二人はいっしょに行った。田中さんはすてきばしょを見る。その時は、すずきさんは田中さんに私にとられてくださいと言った。だから、田中さんはすずき

さんにしゃしんをとった。でも、田中さんはカメラをおちて、すずきさんをおこられた[7]。田中さんは「ごめんね」と言ったけど、すずきさんが「ゆるせない」と言った。（TL 5）

次に、「主人公とそれ以外の人物」に視座が置かれた描写を見よう。中国語を母語とする日本語学習者の文章の場合、田代（1995）は、このような主人公以外の人物の視座から述べる文が多く、日本語の文章として不自然だと指摘している。

TL の文章では、主人公以外の人物の視座から述べる文が多いとは言えないが、視座の移動が観察される。次の（11）は視座が「鈴木」から主人公の「田中」へ移動した文章であり、（12）は視座が主人公の「田中」から「鈴木」へ移動した文章である。

（11）きのう田中さんはある友達と一緒に [旅][8] 行しました。田中さんはさくらの木と写真をとりました。田中さんの友達は自分のカメラで田中さんの写真をとってあけました【鈴木】。それで、二人はとうきょうターワーに行きました。友達はとうきょうターワーと写真をとりたいです。そして、田中さんは友達に写真をとってあけました【田中】。でも、田中さんは友だちにカメラをもどす時に、カメラをおとしました。[友] 達はとてもおこりました。田中さんは友だちにあやまっても、彼は田中さんをゆるされません。ひどいめにあったね。田中さんは。（TL2）

（12）私は日本人の友達があります。その人の名前は田中さんです。ある日田中さんは友達の鈴木さんと約束があった。田中さんは鈴木さんと会ったから、鈴木さんに写真を取ってほしいだから、鈴木さんは田中さんに写真を取ってくれました【田中】。それから、二人に行旅していた。きれいな場所を合ったから、鈴木さんは田中さんに写真を取ってほしいです。だから、鈴木さんは田中さんに写真を取ってもらいました【鈴木】。しかし、田中さんは写真を取ってから、鈴木さんのカメラをおとしました。田中さんは鈴木さんに「ごめんね」と言いました。しかし、鈴木さんはとてもおどろしいですから、田中さんに許さないです。それは私の日本人の友達、田中さんの悲しいことです。（TL6）

以上の文章から、TL は主人公に視座の固定を継続しない傾向が見られ、TL の文章には事実志向の文が多く混じることが示唆された。一方、主人公以外の人物に視座を置いて描写した NS は（13）（14）で示すように 12 名中 2 名いる。

（13）田中くんという友達が鈴木くんという子とお出かけすることになって桜の木の下で

7　視点表現の構文に誤りがあったため、有効データとして扱わなかった。

8　[　] は、日本語に存在しない漢字の書き間違いを示す。

待ち合わせをしたんだって。待ち合わせ時間に田中くんが行くと、鈴木くんがカメラを持って来ていたから、きれいな桜の木と一緒に写真を撮ってもらったんだ【田中】。それから２人は歩いてスカイツリーの見えるところまで行った。よく見えるところで鈴木くんは田中くんに写真を撮ってくれるように頼んで、写真を撮ってもらったまでは良かったんだけど、カメラを鈴木くんに返そうとしたとき、田中くんがカメラを落として壊しちゃったらしいんだ。鈴木くんは大切なカメラを壊されて【鈴木】すごく怒ちゃって、なだめても謝っても許してくれなかったって田中くんは落ち込んでいたよ。（NS2）

（14）私の友達の田中くんは、彼の友達の鈴木くんに会いました。彼らは近くにきれいな桜の木があったので、そこで写真をとることにしました。鈴木くんは、田中くんの写真を桜の木をバックにとってあげました【鈴木】。そして二人はぶらぶら出かけました。すると、スカイツリーが見えてきました。鈴木くんは田中くんに、スカイツリーをバックに写真をとってほしいと言いました。そこで田中くんは写真をとってあげました【田中】。田中くんが鈴木くんにカメラを返そうとしたら、手がすべってカメラを落としてしまいました。鈴木くんはカメラが壊れてしまったので、怒りました。鈴木くんは田中くんにとても怒って、きげんが悪くなってしまいました。田中くんは困っています。（NS6）

多くの先行研究では、NS は視座を固定して表現する傾向があると述べられているが、NS による（13）（14）のように、視座が移動している文章は興味深い。ただし、本研究では傾向を探るために比較できる文章がなかったため、視座の移動はどのような役割を果たしているかを検討することができなかった。

以上、TL と NS の文章を取り上げて、視座の置き方の相違について述べてきた。理解しやすいとされる「主人公のみ」に視座を置いた TL は３名見られた。しかし、「主人公以外の人物のみ」および「主人公とそれ以外の人物」に視座を置いた TL は５名おり、TL 全体のほぼ半数を占めている。これに対して、「主人公のみ」に視座を置いた NS は８名見られたが、「主人公とそれ以外の人物」に視座を置いた NS は２名いる。

この結果は、先行研究で報告されているように「日本語話者には主人公を中心にし、他の人物にはあまり視座を移さずに話を進めようとする傾向がみられる（田代 1995：34）」という点と一致する。また、本研究で見られた NS の傾向に合わせて、水谷（1985）が論じているように、日本語は立場志向が強いことが再確認できた。

一方、NS とは異なり、TL はストーリーを描写する際に、主人公に視座の固定を継続しない傾向があるということが明らかになった。タイ語は事実志向が強いため、TL による日本語の文章には事実志向の文が多いことが示唆されたが、これをさらに裏付けるために、TL の視点表現の使用を分析する必要がある。

2．視点表現の使用状況

視座の位置を判断するために、構文的手がかりとして参考にした視点表現について記述したい。表 5 は調査参加者が使用した視点表現をまとめたものである。

表 5　視点表現の使用数（例）

	TL	NS
受動表現	2	2
授受表現	12	21

表 5 で分かるように、TL と NS の視点表現の使用数はほとんど変わらない。受動表現の場合、漫画の設定上、受動表現が使用しにくいと考えられ、TL も NS もそれほど用いていない。それに比べ、NS も TL も授受表現を多用している。しかし、TL の場合は授受表現を使用したにもかかわらず、視座の移動が観察された（12 名中 4 名）。

以上のことから、TL は視点表現を学習していても、適切に使用できるとは限らないことが分かった。ここでは、受動表現と授受表現に分け、TL と NS による文章の相違点を分析しながら、TL の問題点について考察したい。

（1）受動表現の使用

本研究では、TL と NS が視座を固定するために、描写タスクにおいて受動表現を使用することを想定した。しかし、描写タスクを実施したところ、受動表現の使用は、TL は 2 例、NS は 2 例のみであった。TL は（15）（16）で示すように 2 例とも「怒られる」であるのに対して、NS は（17）の「壊される」と、（18）の「頼まれる」であった。

（15）すずきさんにカメラをかえすつもりだ、でも、カメラをおちた。そのりゆうは今まですずきさんにおこられている【田中】。（TL3）
（16）でも、しゃしんをとったあとで、田中はカメラをおとしてしまった。田中さんはおこられた【田中】。（TL7）
（17）鈴木くんは大切なカメラを壊されて【鈴木】すごく怒っちゃって、（後略）。（NS2）
（18）鈴木にさ、スカイツリーと一緒に写真をとってよってたのまれたから【田中】、OK っていってとってあげたんだって。（NS9）

ここでは、TL の「怒られる」に注目して叙述したい。TL の受動表現の習得について、サウェットアイヤラム（2008：199）は「母語からの『正の転移』として、JFL[9] は被害を感じる場合で

9　Japanese as a Foreign Language の略語であり、ここではタイ人日本語学習者を指す。

は受身が問題なく使用できる。逆に、被害を感じる場面以外では受身使用が見られなかった」と述べている。

以上の指摘で述べると、TL は「怒る」を被害の動詞として捉えており、被害を受けた場面について描写する際、難なく受動表現を使用している。しかしながら、本研究では「怒る」を能動表現で描写した TL がほとんどである。「怒られる」を用いなかった理由は、主人公である「田中」の友人になりきれなかったため、「怒る」に含まれた被害の意を感じ取れなかったことにあると言えよう。

逆に、NS では「怒られる」が見られず、「怒る」を能動表現のみ使用されている。フォローアップ・インタビューの結果、NS は相手との関係などを考慮しながら描写するため、受動表現の使用を避けることが分かった。例として「怒られる」を使用すると相手を責めることになるため、避けているという回答が得られた。他に、相手が目上の人ではなく、友人関係のため「怒られる」という受動表現を使用しないという回答もあった。

（2）授受表現の使用

描写タスクにおいては、受動表現に比べ、TL も NS も授受表現を多用している。しかし、TL の場合、授受表現を使用したにもかかわらず、視座を移動させた文章が見られた。こうした傾向は主人公が写真を撮ってもらった場面③と、主人公が写真を撮った場面⑦で観察できる。

それでは、タイ語の授受表現について見てみよう。タイ語の授受表現は、利益・恩恵の方向を問わず「～てあげる」「～てくれる」に相当する「～ hây」[10] 表現で表す。そのため、日本語で表現する際にも、TL は利益・恩恵の方向を配慮せず、「誰がしてあげたか」というように、そのまま与え手を主語にして表現する可能性がある。換言すれば、TL による日本語においてもタイ語の影響で、事実志向の文を使用する傾向が見られる。TL2 による（19）とタイ語で書いた（20）、TL11 による（21）とタイ語で書いた（22）を参照されたい。

（19）田中さんの友達は自分のカメラで田中さんの写真を<u>とってあけました</u>【鈴木】。（中略）
そして、田中さんは友達に写真を<u>とってあけました</u>【田中】。（TL2）

（20）phûan kɔ̂ɔləəy cháy klɔ̂ɔŋ khɔ̂ɔŋ phûan <u>thàay</u> rûup <u>hây</u>[11] （中略）
友達 だから 使う カメラ の 友達 撮る 写真 あげる
man kɔ̂ɔ <u>thàay</u> rûup <u>hây</u> phûan bâaŋ （TL2）
こいつ だから 撮る 写真 あげる 友達 も

10 「hây」自体は動詞であり、「あげる」という意味を表す。「hây」の前に別の動詞が付加されると「～ hây」表現になり、「～てあげる」に相当する。例として「sɯ́ɯ hây」（買ってあげる）、「khĭan hây」（書いてあげる）、「tham hây」（やってあげる）などの表現が作られる。

11 本稿ではタイ文字を省略して、発音表記のみを提示した。

（直訳）：だから、友達は友達のカメラを使って、写真を撮ってあげた。（中略）だから、こいつも友達に写真を撮ってあげた。

（意訳）：だから、友達（鈴木）は自分のカメラで写真を撮ってあげた【鈴木】。（中略）だから、こいつ（田中）も友達に写真を撮ってあげた【田中】。

（21）そして、田中さんきれいな木を見て、しゃしんをとりたいと思っていました。だから、彼は友達を願いました。友達はしゃしんをとってくれました【田中】。（中略）だから、田中さんはしゃしんをとってくれました【鈴木】。（TL11）

（22）phûan　kɔ̂ɔ　thàay　hây　duu　khwaam-caydii　（中略）　Thaanaakà
友達　だから　撮る　あげる　見る　優しさ　田中
cuŋ　thàay　rûup　hây　（TL11）
だから　撮る　写真　あげる

（直訳）：だから、友達は優しさを見せ、撮ってあげた。（中略）だから、田中は写真を撮ってあげた。

（意訳）：だから、友達（鈴木）は喜んで撮ってあげた【鈴木】。（中略）だから、田中は写真を撮ってあげた【田中】。

（19）～（22）で分かるように、日本語の文章における視座の移動は、「誰がしてあげたか」を中心とされる「～ hây」表現の影響によると言える。タイ語の（20）と（22）は、主人公でない人物に視座が置かれているが、タイ語としては理解しやすく、不自然さが感じられなかった。このように、TL は日本語で描写する際に、授受表現に含まれた利益・恩恵の方向に注意しなければ、文章の中で視座を移動させる可能性が高まる。

最後に、NS の書いた文章との相違点として、TL の文章では授受表現を使用しないため、話者が主人公をウチの人物として捉えていないような表現が観察された。主人公が相手に無視された場面⑩に現れる「許す」に注目して記述したい。TL による（23）と（24）では、授受表現が用いられていない。すなわち「誰が謝ったか」や「誰が許さなかったか」という事実をそのまま伝える事実志向の文になっている。

（23）どうして田中さんはおれいを言ってもすずきさんはまだゆるさない。（TL7）

（24）田中さんは鈴木さんに何度も「ごめんね」と言っても鈴木さんは田中さんにゆるしませんでした。（TL9）

一方、NS による文章を見ると、授受表現が使用されており、自分の友人という設定である主人公をウチの人物として意識していることが示唆された。（25）と（26）で分かるように、立場志向の文の使用が顕著であった。

（25）（前略）、田中はすごい謝ったらしいんだけど、鈴木は許してくれなかったらしいよ

【田中】。（NS8）

（26）田中くんはすぐに謝ったんだけど、鈴木くんは許してくれなかったんだって【田中】。（NS12）

以上の用例から、同様の場面において TL は（23）（24）で示すように、視座の固定が見られなかったが、NS は（25）（26）で見られたように、視座が「田中」に固定されていることが分かった。すなわち、場面⑩では TL は視座を意識していないことが示唆され、そのまま「誰が動作を行ったか」というように事実志向の文を用いて表現する傾向が見られる。これに対し、繰り返しになるが、水谷（1985）の指摘で述べると、NS の文章では立場志向が強いことが改めて確認できた。

V. まとめ

本研究では、友人という設定の人物が登場する漫画を題材に、描写タスクに TL と NS を参加させた。得られた文章に基づき、視座の置き方および視点表現の使用状況について考察した。視座の置き方を分析した結果、NS は主人公に視座を固定して表現する傾向があった（12 名中 8 名）。一方、TL は主人公に視座の固定を継続しない傾向（12 名中 5 名）が観察された。

また、視点表現の使用状況を探ると、受動表現の用例が少なかったが、TL は「怒られる」という被害を表す受動表現を使用している。この傾向は、NS には見られなかった。なぜなら、NS は相手との関係などを配慮しながら、場面に適した表現を選択して描写するからである。

さらに、授受表現に関しては、タイ語の授受表現である「～ hây」表現による影響が観察された。TL は授受表現を学習したにもかかわらず、「誰がしてあげたか」というように、与え手の立場から表現することが見られ、場面にそぐわない表現を使用している。それに、ある場面では TL は授受表現を使用せず、「誰が動作を行ったか」を中心に、事実をそのまま表現する傾向が確認された。要するに、日本語は立場志向が強いのに対して、タイ語は事実志向が強く、TL は日本語で表現する際にも、事実志向の文が混じることが多い。それが原因で、結果的に TL の日本語の文章は視座が固定されておらず、一連のある談話として理解しにくいと言える。

以上、TL の視点表現に関わる問題点についてまとめた。本稿で示す視点表現の用例を見て分かるように、TL は視点表現の構文を学習したことが明らかである。しかし、それを視座の固定の概念に関連づけていないことが示唆された。視座の移動や、視点に関する指導に関しては、坂本（2005：8）が「『視座の不統一』は誤用ではない。しかしながら、日本語の読みやすさに大きく関わるものであることを考えると、授業に明示的に視点に関する指導を組み込んでいく必要がある」と指摘しているように、視点表現の構文が定着した段階で、TL に視座の固定という概念を意識させることが重要である。

今後の課題として、調査参加者に主人公になりきってもらうために、第三者の出来事を描写するのではなく、自分が体験した出来事として描写させることが考えられる。また、漫画の設定は調査参加者の描写の仕方に影響する可能性があるため、工夫する必要がある。

* 本調査に際し、調査実施校のタイ人学生ならびに日本人学生の皆様にご協力をいただきました。
ここに感謝の意を表します。

参考文献

市川保子．1997．『日本語誤用例文小辞典』凡人社.
大江三郎．1975．『日英語の比較研究―主観性をめぐって―』南雲堂.
大塚純子．1995．「中上級日本語学習者の視点表現の発達について―立場志向文を中心に―」『言語文化と日本語教育』9号，281‐292ページ.
奥津敬一郎．1983．「何故受身か？―＜視点＞からのケース・スタディ―」『国語学』第132集，65‐80ページ.
金慶珠．2001．「談話構成における母語話者と学習者の視点―日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に―」『日本語教育』109号，60‐69ページ.
魏志珍．2010．「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方―日本語の熟達度との関連性―」『日本語教育』144号，133‐144ページ.
久野暲．1978．『談話の文法』大修館書店.
サウェットアイヤラム　テーウィット．2008．「タイ人日本語学習者の受身の習得」『言葉と文化』、名古屋大学大学院国際言語文化研究科，Vol. 9，187‐204ページ.
坂本勝信．2005．「中国語を母語とする日本語学習者の『視点』の問題を探る」『常葉学園大学研究紀要』21号，1‐10ページ.
佐藤史子．1997．「英語を母語とする日本語学習者の談話分析―話し手の心理的視点と表現に関する考察―」神田外国語大学大学院紀要『言語科学研究』3号，43‐58ページ.
武村美和．2010．「日本語母語話者と中国人日本語学習者の談話に見られる視座―パーソナル・ナラティヴと漫画描写の比較―」『広島大学大学院教養学研究科紀要』第59号，289‐298ページ.
田代ひとみ．1995．「中上級日本語学習者の文章表現の問題点―不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる―」『日本語教育』85号，25‐37ページ.
田中真理．1997．「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92号，107‐118ページ.
中浜優子・栗原由華．2006．「日本語の物語構築：視点を判断する構文的手がかりの再考」『言語文化論集』第XXVII巻第2号，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，97‐107ページ.
松木正恵．1992．「『見ること』と文法研究」『日本語学』第11巻第9号，57‐71ページ.
水谷信子．1985．『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版.
茂呂雄二．1985．「児童の作文と視点」『日本語学』第4巻第12号，51‐60ページ.
Raruaisong, Tanapat．2011．『日本語とタイ語の受動文の分析―使用制限の対照を中心に―』筑波大学大学院人文社会科学研究科修士論文.
林美琪．2005．「中国語を母語とする日本語学習者の談話展開における視点の習得研究―台湾人日本語学習者を対象に―」『Sophia Linguistica』53号，33‐48ページ.